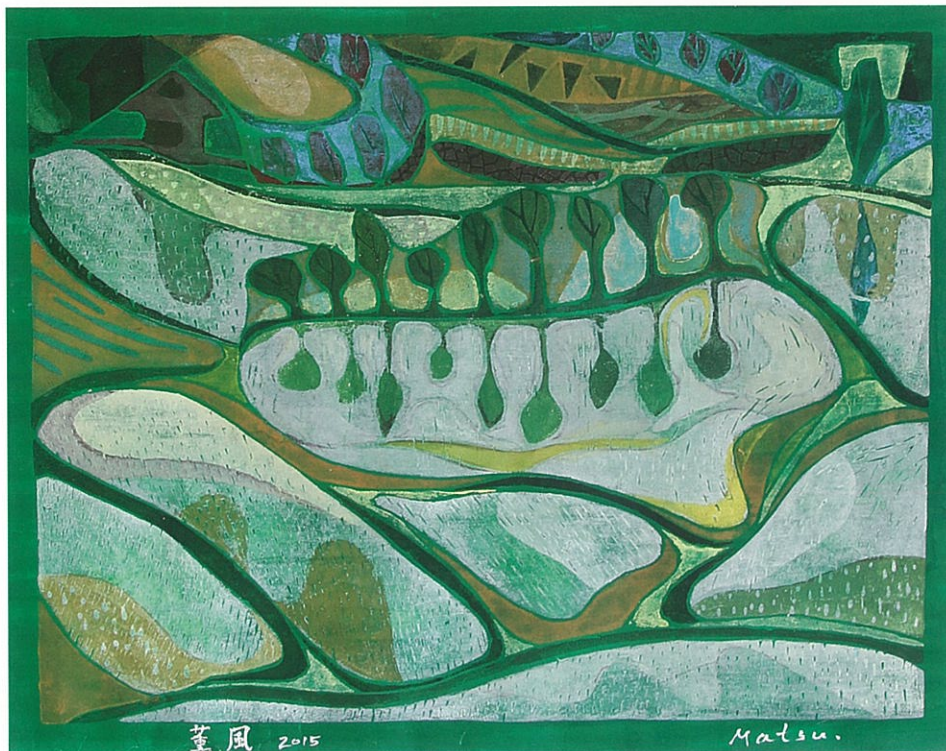


同窓会誌

69



カラーグラビア① 「活躍する教育学部アスリート
飛込みでオリンピックを目指す須山晴貴選手」

カラーグラビア② 「ホームカミングデー・スナップ」

カラーグラビア③ 「同窓会の活性化を目指して—平成29年度の同窓会の活動—」

特集 「アンケート調査：卒業生の同窓会意識を探る」

島根大学教育学部同窓会

ホームカミングデー・スナップ



※P32に関連記事を掲載しています。

活躍する教育学部アスリート 飛込みでオリンピックを目指す須山晴貴選手

教育学部同窓会「激励金」贈呈者



須山 晴貴 さん

教育学部健康・スポーツ教育専攻 2年生
松江市大庭町 松徳学院高等学校 出身

小学3年の時に姉の影響で飛込み競技を始め、小学4年で全国優勝し、本格的に飛込みの世界へ。高校時代はインターハイや国体で優勝するなど優秀な成績を取っている。地元に進学したいと島根大学に入学し、現在は学業と練習や大会参加との両立で忙しい日々を送る。



美しさと正確さを競う飛込みで
日本を代表する選手に

須山選手は、平成二十八年九月に開催された水泳の日本学生選手権男子3m板飛込みで優勝、同年十一月に開催されたアジア選手権大会では三位入賞を果たした。その後も、国内外で行われた各種大会において優秀な成績を収め、今後も、日本のみならず世界での活躍が期待される選手である。

※引用・参考文献 島根大学広報誌「しまだい」2017・vol 31
※グラビア②およびP74に関連記事を掲載しています。

—平成29年度の同窓会の活動—

学部ホームカミングデー (10月21日)



模擬面接への協力 (6月14日)



刊行物の発刊

同窓会誌



「友朋同窓会」
「昭和41年小学課程入学」
「アンダーグラウンド」
「アンダーグラウンド」
「アンダーグラウンド」
島根大学教育学部同窓会

会誌69号
(H30・1月23日)



Leaf@同窓会 No.9
(9月22日)

同期生会



「友朋同窓会」
〈昭和36年卒業〉(10月25日)



「昭和41年小学課程入学」
〈昭和41年入学〉(10月24日)

同窓会の活性化を目指して

役員総会 (6月10日)



総会後の学生の演奏



教育振興奨励賞授与式(12月8日) —原 丈貴氏受賞—



激励金贈呈式 (6月1日) —須山晴貴さん受賞—



支部活動(東京支部：総会・懇親会10月22日)



目次



- カラーグラビア① 活躍する教育学部アスリート 飛び込みでオリンピックを目指す須山晴貴選手
 - カラーグラビア② ホームカミングデー・スナップ
 - カラーグラビア③ 同窓会の活性化を目指して—平成29年度の同窓会の活動—
- 母校今昔 教育学部「水泳訓練」の事実
 巻頭言 自分との語らい……………教育学部同窓会理事長 原 広治 (2)
 同窓会は今「同窓会」の、どこに問題があるのでしょうか？……………教育学部同窓会長 有馬 毅一郎 (4)

教育学部最前線

教育学部への新たな波—「ミッションの再定義」のその後とこれから—
 ……………教育学部部長・大学院教育学研究科長 小川 巖 (6)

特集 アンケート調査 卒業生の同窓会への意識を探る (15)

- 1. はじめに…………… (16)
- 2. アンケート調査の概要…………… (16)
- 3. アンケート調査の結果と考察…………… (17)
- 4. 終わりに…………… (27)

第11回教育学部ホームカミングデー (32)

- 講演
 - ・「教育から地域を魅せる」大畑 伸幸…………… (33)
 - ・「地域教育の新たな学び」岩本 悠…………… (34)
- ワールドカフェ・懇親交流会…………… (36)

私の研究紹介…………… (28)

教職回顧…………… (30)

支部からの声…………… (38)

第6回教育振興奨励賞決定…………… (31)

飛び込み須山晴貴選手に「激励金」を贈呈…………… (74)

専攻だより —研究室はいま—…………… (41)

平成28年度島根大学教育学部卒業研究題目一覧…………… (66)

平成28年度島根大学大学院教育学研究科修士論文題目一覧…………… (73)

ただいま活躍中!!…………… (75)

母校今昔 (続) 教育学部「水泳訓練」の事実 余話…………… (52)

近況報告

本部だより…………… (54) 有志会・同期生会だより…………… (57)

島根大学教育学部同窓会規約・同窓会個人情報の保護に関する規程…………… (84)

事務局より…………… (14) (65) (79) (80) (81) (82) (83)

受贈図書紹介…………… (51) (78) 表紙に寄せて・編集後記…………… (88)

母校 今昔

教育学部「水泳訓練」の事実

島根大学教育学部の「水泳訓練」は、その当時、全国の大学でも例を見ない画期的な事業であった。この水泳訓練が始まる経緯や初期の頃の様子は、教育学部同窓会誌の厚生補導長による記事や教授会の資料などによって垣間見ることができる。同窓会誌には、次のように書かれている。

昭和30年5月11日、松江市立川津小学校6年生が高松市方面への修学旅行の帰途に宇高連絡船紫雲丸に乗船、宇野港への航行中第三宇高丸と衝突、教員、児童66名中25名が遭難した。この悲しい事件を契機に教育学部では教員の水泳技能の必要性を痛感し、在学生に対する水泳訓練の実施に踏み切った。

訓練初期の昭和30年ころ (古浦海岸)

第1回の水泳訓練は、事件直後の6月1日の教授会で実施が決められ、同月22日に実施要領が策定され、7月中旬に鹿島町恵曇の古浦海岸で実施された。(詳細は不明)

第2回は翌年の昭和31年7月17日から3日間古浦海岸で実施された。教師(特に義務教育諸学校)の資格として必要な水泳に関する知識技能の向上をはかることを目的とし、学部1年生全員を対象として実施された。



昭和36年 実施 本部テント



昭和36年 準備体操

昭和40年ころ (島根大学プール)

この水泳訓練も昭和38年ころからは美保関町の北浦海岸で行われるようになった。

その後、大学に50メートル、8コースの立派なプールが昭和39年に新設され、3日間の水泳訓練のうち前半の2日をプールできめ細かい指導を行い、3日目には海へ移動して遠泳の実技訓練を行うスタイルがとられるようになった。



昭和50年頃 島大プール

※ P.52~53に関連記事を掲載しています。



自分との語り

教育学部同窓会理事長 原 広治

もう二十年以上も前のことになりましたが、私が仕事を始めてからずっとご指導をいただいていた師匠にあたる先生が入院され、お見舞いに出かけたとき、師は次のように話されました。「お前、今日は暇だろ？ そんなら、ここにしばらくおれや。今から、二人の看護師が病室にやってくるけど、どっちの人が夜勤だと嬉しいかわかるか？」と。

二人を観察して違いを話せということはわかったものの、その話の意図がつかめないままにいと、やがて、ノックの音とともに一人の看護師さんがやってきました。「○○さん、今朝の気分はいかがですか」と話しかけながら、体温や血圧を測定し、食事量などを確認して退室されました。

二人目の看護師さんは、昼食後しばらくした時刻に、やはりノックの音とともにやってきました。そして「○○さん、今日はいい天気で気持ちがいいですねえ」と話しかけながら、体温や血圧を測定し、食事量などを確認して退室されました。

二人とも声をかけながら入室され、決められたことを丁寧にチェックして退室されています。何が違うというのでしょうか。しばらく考えてみるものの答えに辿り着きません。私が「二人とも笑顔で話しかけてくださってわるい気はしないし、看護上の確認も漏れなくされているし、二人の違いがわかりません」と答えると、師は、いつものように辛辣口調で、「だからお前の臨床はいつまでたってもつまらんわや。いいかや、最初に来た看護師は、心をドアの向こうの廊下に置いて入ってきていて、二人目の看護師は、心と一緒にここに入ってきてくれていて。お前だったら、どっちの看護師が夜勤だったら嬉しい？ 俺は心を持ち込んでくれる二人目の看護師だな。まっ、お前みたいな健康なヤツには、その違いなんてわからんだらうけど」と一言。

「心」を部屋の外に置いてくる人と、共に部屋の中に入ってくる人。いつもすぐには答えを言われない師は、その後まもなく天に召され、この話の続きを直接にすることはできなくなりましたが、残された私は、そのときから今も答えとその意味解釈を追究し、自問自答を繰り返しながら教育臨床を続けています。

今現在の私は、この心を「相手の身になって相手のことを想う心、尊重する心」ではなかったのかと理解しています。「ベッドに横たわるのは病人ではなく尊重すべき人であり、相手のこれまでの人生を斟酌した。今」を思量し、心を寄せながら、自分にできることを一つ一つ丁寧に工夫しながら看護する。相手は治療する対象であるかもしれないが、相手は偉く自分自身の学びに導いてくださる対象でもある。事務的な姿勢で仕事をしない。という声が天から聞こえてきそうです。質の高い看護というとき、科学の最先端である医療現場においては、看護師が最新の看護知識や高度な看護技術を修得することは勿論なのでしようが、ユーザー側からすれば、加えて、知識や技術を駆使する看護師自身の人となりが必要な要件であることは言うまでもありません。

ご自分の病氣を知り、容易には払いのけることができず不安を微塵も表されることのない師でしたが、毎夕、病室からの風景が暗くなることに相まって、どことなく寂しくなる気持ちや想うとき、相手を自分のこととして見てくれる人とそうでない人のどちらが夜勤の看護師であるかは、ご自分ではどうにもならないことながら、大きな関心事だったにちがいません。

教育臨床を振り返り、それを「ことば」に翻訳することで自分自身や今の臨床に対する理解が深まります。そこで語る「ことば」が新たな意味づけや関係づけによる現実を創り出し、臨床のさらなる可能性を探ることになります。体験を通して、身体の中を通して得られる自らの「ことば」を伝えあうことで、自分を再発見し、自分の内に問題に対処する力を見いだしていきます。そのような作業を通して初めて、相手の心に届くことばや心に届く臨床になるのだらうと思うのです。

自分との語りから生まれる私の「ことば」。そこにある私の「心」によって、私の臨床スタイルは決定づけられます。自らの言動に自らの心が添えられているのか。かつての師からの教えは、今の時代にあっても、臨床に携わる者にとって欠くことのできない大切なことだと実感する日々です。

原 広治プロフィール

出雲市斐川町出身

平成二十一年から教育学部教授

平成二十八年から教職大学院教授